Osaka University Knowledge Archive

Title	現代中国語の感情表現をめぐる構文研究 ―日本人中国語学習者の誤用を契機として―
Author(s)	黄, 勇
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76610
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　黄 勇　　）	
論文題名	現代中国語の感情表現をめぐる構文研究 ―日本人中国語学習者の誤用を契機として―

論文内容の要旨

本研究は、日本人中国語学習者による誤用を出発点とし、中国語の感情表現をめぐる構文の全体像解明を目的としている。中国語の構文研究を見渡すと、空間・移動などという視覚で認識できる表現をめぐる構文研究が主流であった。視覚的に捉えにくい感情表現に関連する構文研究は、あまり重要視されてこなかった。そこで、本研究では、感情表現に関連する構文を感情構文と呼び、「SVO型感情構文」と「SPOV型感情構文」と「SV型感情構文」との3種類の構文について、構文の形式および意味の観点から考察を行った。加えて、在日中国語教育に向けて、日本人学習者の中国語の感情表現の習得状況について、アンケート調査を行い、その調査の分析結果を踏まえて、中国語教育への提言も行った。本論文は、全7章から構成される。

第1章では、本研究の出発点や目的を明示した上で、論文全体の構成を示した。また、論文で使用する例文の出典についても明記した。

第2章では、本研究と関連する先行研究を分類し、その知見を概観した。第1節では、従来の研究が感情と言語の関係をどのように捉えてきたのかを紹介し、本研究への示唆を明示した。第2節では、語彙面からの先行研究について、感情動詞と感情形容詞という2側面から紹介した上で、本研究の立場を示した。第3節では、構文面からの先行研究について、巨視的視点と微視的視点から整理し、本研究の立場を示した。

第3章では、SVO型感情構文について考察を行った。まず、〈感情主〉を主語の位置に限定して論じられてきた従来の研究に対して、SVO型感情構文を次の2タイプに区分すべきだと指摘した。すなわち、〈感情主〉主導のSVO型感情構文と〈刺激体〉主導のSVO型感情構文である。その上で、構文の構成要素としての感情述詞や〈感情主〉や〈刺激体〉の特徴を探ることで、SVO型感情構文の構文的意味を明らかにした。

第4章では、SPOV型感情構文について考察を行った。SVO型感情構文と同様に、SPOV型感情構文も〈感情主〉主導のタイプと〈刺激体〉主導のタイプとの2タイプに分けるべきだと指摘した。さらに、この2タイプについて、それぞれ三つの前置詞に絞って考察を行った。具体的には、〈感情主〉主導のタイプは、“对”・“为”・“被”であり、〈刺激体〉主導のタイプは、“让”・“把”・“给”である。また、各前置詞を用いる感情構文について、感情述詞や副詞の生起位置や付加成分などを重点的に論じた。最後に、各構文の構文的意味について検討した。

第5章では、SV型感情構文について考察を行った。従来の研究とは異なり、この構文は〈感情主〉主導のSV型感情構文と〈刺激体〉主導のSV型感情構文という2タイプに分けられると指摘した。また、共起し得る感情述詞の特徴を考察した上で、感情述詞の直前に付随する程度副詞の種類を論述した。大まかに分類すれば、“很”類と“好”類があるということを明らかにした。ただし、両構文の間では異なる様相を呈している。〈感情主〉主導のSV型感情構文は、相対的に複雑な様相を呈しており、一方で、〈刺激体〉主導のSV型感情構文は、相対的に単純な様相を呈している。その上に、日本語のように、中国語の感情述詞が裸の形で成立しないと主張してきた従来の研究についても、批判的検討を行った。さらに、SV型感情構文の構文的意味を明示した。

第6章では、第3章から第5章までの考察結果を踏まえて、中国語の中間言語コーパスと、日本人中国語学習者を対象としたアンケート調査から収集した用例について検討を行い、日本人学習者の誤用パターンを整理した。その上で、在日中国語の感情表現教育に向けて、① 感情述詞と感情構文とを結合させた教授法；② 感情描写文と感情表出文とに分けた教授法；③ 日本語の感情表現の特性を踏まえた教授法という3点の提言を行った。

第7章では、第3章から第6章における考察内容をまとめ、今後取り組むべき課題を提示した。本研究の基本的姿勢は、在日中国語教育において、中国語の感情表現の誤用例として顕現する理由を学習者の母語すなわち日本語の表現方法に存在するとの観点から考察したものである。本論文は、在日中国語教育に貢献し得ると思量する。また、中国語の構文研究において、無視されがちな感情構文の全体像を明らかにしたことによって、中国語の構文研究の体系化にも一石を投じることができたと言える。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　　黄　　勇　　）			
論文審査担当者		（職）	氏　　名
	主 査	教授	古川　裕
	副 査	教授	清水政明
	副 査	准教授	林　初梅
	副 査	講師	鈴木慎吾
	副 査	講師	中田聡美

論文審査の結果の要旨

『現代中国語の感情表現をめぐる構文研究－日本人中国語学習者の誤用を契機として』と題する本論文は、従来の中国語理論研究および中国語教育研究の分野において論じられることが比較的少なかった「感情表現」という興味深い研究テーマについて、現代中国語の言語事実に考察の的を絞り、様々な感情表現に対する構文論的・意味論的分析を行い、その分析結果に基づいて、日本語を母語とする中国語学習者への教育に有効な教育法を提言しようと志した、たいへん優れた論文である。

現代中国語の理論研究では、専ら他動性の高い動詞が構成する動的な事態を描く構文に関する研究が主流であり、教育現場においても、そのような研究成果を基礎とした文法項目を教え学ぶのが一般的であった。しかしながら、外部から視覚では認識できない、個々人の内的な心理経験を言語を用いて伝えるための感情表現や感覚表現については、研究面での大きな空白が残されていた。特に外国語を学ぶ場合、自分自身の内的感情や感覚を母語によるのではなく、後天的に習得した外国語を用いて表現することの困難さは誰もが同じく経験するところであり、理論的な研究成果が教育現場に応用できるならば、非常に価値のある研究として期待できるテーマである。このような非母語話者の問題意識を出発点として、感情表現をめぐる研究は現代中国語研究の学界では中国本土よりも日本での問題意識が相対的に強く、大河内康憲1997、古川裕2003、木村英樹2017などの先行研究が数少ない成果として残されている。本論文はこの研究の流れを正しく継承し、これらの先行論考が十分に説き及ばなかったポイントを指摘し、合理的に解釈するなどして、研究を前に進めている点は高く評価できる。

本論文は、以下のように全7章から構成されている。
第1章「はじめに」は、研究の背景と目的及び意義を明らかにし、本研究の構成を表している。

第2章「先行研究概観」では、先行研究が感情と言語の関係をどのようにとらえてきたのかを紹介し、語彙論と構文論の両面から先行研究の知見を整理し、本研究の立場を示している。

第3章「SVO型感情構文について」では、SVOタイプの感情表現が従来注目されてきた〈感情主〉主語の構文だけではなく、〈刺激体〉が主語となる構文も存在することを指摘し、具体的にどのような感情述詞がこのタイプの構文を形成するのかを、表とイメージスキーマによって明示している。

第4章「SPOV型感情構文について」では、前置詞を文中に導入することで成立する構文について、前章と同じように〈感情主〉主語構文と〈刺激体〉主語構文に分けて論じている。ここでは、構文の骨組みだけの分析にとどまることなく、この構文に現れる副詞にも視野を広げ、構文的意味の違いがこれらの付加成分の生起位置に反映することを客観的に証明しており、注目に値する。

第5章「SV型感情構文について」でも、〈感情主〉が主語となるSV構文と〈刺激体〉が主語となるSV構文を区別し、それぞれの構文を形成する感情述詞をリストアップし、程度副詞や付加成分の生起条件を分析している。

第6章「在日中国語教育にむけて」では、第3章から第5章までの考察結果に基づいて、中国語学習者の中間言語コーパスと、日本人中国語学習者を対象としたアンケート調査から収集した用例について細かな検討を行い、日本人学習者の誤用パターンを整理している。これによって、① 感情述詞と感情構文とを結合させた教授法、②感情描写文と感情表出文とに分けた教授法、③ 日本語の感情表現の特性を踏まえた教授法という3点を提言している。

第7章「おわりに」では、本論文の研究結果を最後にまとめなおし、今後取り組むべき課題を提示している。

上述のように、本論文は、その表題と副題が示す通り、日本語を母語とする中国語学習者への教育と学習に貢献することに研究目的を定めて、感情表現にかかわる数種類の構文について構文論と意味論の角度から考察を行い、先行研究に不足している点を指摘し、慎重かつ論理的に分析を行ったものである。用語の定義や記述方法など、修正や訂正を必要とする箇所もいくつか残ってはいるが、本論文が中国語の理論研究において未だ十分に研究されずに残されてきた大きな空白地帯を埋め、日本語母語話者に対する中国語教育において一定の貢献をしうるであろうことに、何よりも大きな学術的価値が認められる。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。